

第18回 KKKコンサート
古典四重奏団 QUARTETTO CLASSICO

ドヴォルザーク 弦楽四重曲集

2006年10月26日(木) 18時開演
於：研究本館1階レクチャーホール

アントニン・ドヴォルザーク
Antonín Dvořák

弦楽四重奏曲第14番変イ長調作品105
String Quartet in Ab op.105

- 1 アダージョ・マ・ノン・トロッポ - アレグロ・アパッショナート
Adagio, ma non troppo - Allegro appassionato
- 2 モルト・ヴィヴァーチェ
Molto vivace
- 3 レント・エ・モルト・カンタービレ
Lento e molto cantabile
- 4 アレグロ・ノン・タント
Allegro, non tanto

< 休憩 Intermission >

弦楽四重奏曲第13番ト長調作品106
String Quartet in G op.106

- 1 アレグロ・モデラート
Allegro moderato
- 2 アダージョ・マ・ノン・トロッポ
Adagio ma non troppo
- 3 モルト・ヴィヴァーチェ
Molto vivace
- 4 フィナーレ (アンダンテ・ソステヌート-アレグロ・コン・フォッコ)
FINALE Andante sostenuto - Allegro con fuoco

曲目解説： 川原千真

交響曲《新世界より》やスラヴ舞曲などの作品で知られロマン派の巨匠として名高いドヴォルザークですが、弦楽四重奏曲をはじめ室内楽のジャンルでも多くの名作を遺しています。

1841年、チェコの小さな村（ネラホゼヴェス、旧ミュールハウゼン）に生まれ並外れた才能を開花させたドヴォルザークは、74年にオーストリアの国家奨学金を受けたことからその名を世界に広げていきました。ベートーヴェンやシューベルトだけではなく前進的なヴァーグナーやリストにも影響を受けますが、同国の先輩スメタナのオペラに大きな衝撃を受け、祖国の血を根底にした真のチェコ音楽を確立し広めることで民族解放と独立の力となるよう尽します。ドイツ・オーストリアはもちろんのこと、イギリスやロシアなど多くの土地で精力的に活動し、またアメリカへの渡航では音楽院の院長に就任、チェコ音楽にアメリカの香りを融和した独特の世界を築き上げました。

ドヴォルザークの魅力が惜しみなく注がれている絶対音楽といわれている分野でも特に室内楽、弦楽四重奏はその数も多く、奨学金の審査員であり生涯の暖かな関係を結んだブラームスに献呈した四重奏曲をはじめ、自身の青春の記念碑ともいべき歌曲《糸杉》を弦楽四重奏に編曲したもの、スラヴの色彩が濃い変ホ長調、渡米中に書かれた《アメリカ》、チェコに帰国した喜びを託した変イ長調、ト長調など全部で15曲に及んでいます。これらの作風や時期からも、ドヴォルザークが自身の生涯にわたる真情をこの形式に託した、その深い愛着を感じ取ることが出来ます。

弦楽四重奏曲 第14番 変イ長調 作品105

3年間のアメリカ生活はドヴォルザークに深い疲労感をもたらしたものの、プラハに帰り懐かしいヴィソカーで夏を過ごし、音楽院で教鞭をとるなどかつての日常を取り戻すにつれ、彼の創作にも再び力が戻って来たようでした。帰国のわずか3週間前に着手されたこの作品は第1楽章冒頭の部分のみを書かれたままでチェコに携えられ、その後新たな四重奏曲（ト長調、作品106）が完成したのち、中断されてから9ヶ月経って再び手を入れられ始めました。作品全体としては落ち着いた古典的形式と暖かな情感が支配するなか、溢れ出る帰国の喜びと祖国への感謝の念はそここに幸福感のある表情をみせています。

第1楽章、荘厳な導入部の後喜ばしい第1主題が誉れ高く歌われ、特徴的なリズムと汽笛を思わせる音像が情景的な第2主題が交互に、またせめぎあって曲に息吹を与えます。切れ味の小気味良い主題と移ろう和声の魅力的な主題、そして自身のオペラ《ジャコバン党》からのアリアを転用している第3の主題（トリオにあたる）をもつ第2楽章スケルツォは、その爽快感のある旋律が曲の生き生きとした流れを際立たせています。堅固な三部形式であることを全く感じさせない天上的な美しさをもつ緩徐楽章を経て、ロンドソナタ形式の終楽章では現れる3つの主題それぞれの個性が見事に浮き彫りになり、作品の最後を実に彩り鮮やかなものにしていきます。

弦楽四重奏曲 第13番 ト長調 作品106

この作品は変イ長調とともに1895年に完成され、多くの演奏家の要望にせかされる形で翌夏ジムロックから出版されました。ドヴォルザークの室内楽曲、また絶対音楽とされる分野の最後の作品となったこれらは、民族色の特別な濃さはなくまた古典的形式の範疇にしっかりと根を降ろしていますが、このト長調の作品の方がより取扱う要素が複雑でその規模も大がかりなものとなっています。

魅力的な旋律がひとつ歌われればすぐにさらに魅力的なオブリガートがそれに重なり、展開部や連結部にさえ全く色彩の違う魅力的な動機がまたさらに尽きることなく現れる、というドヴォルザークの常である溢れ出る豊富な楽想はそのままですが、より成熟度を増した主題と多様な情感は明らかに帰国以前のものとは趣きを異にしています。第1楽章、自由に形を変化されたソナタ形式は、2つの第1主題が対照的な表情をみせた後たおやかな第2主題が曲の雰囲気を一変します。作者のスラヴへの深い憧憬が満ちている主題が歌われる緩徐楽章は、その変幻自在な変奏の見事さに作者のこの主題への格別の愛着を感じ取ることが出来ます。チェコ民謡スコチナーの要素を持ちながらも精悍なリズムが鋭刺とした躍動感を感じさせるスケルツォは、森の中での狩を想起させるホルン五度が用いられているトリオを挿んでいます。終美を飾るフィナーレは冒頭短い導入ののち、舞踏リズムの朗らかな主題や生命力溢れる主題、繊細な伴奏をもつ流線形の主題が次々と耳を楽しませてくれますが、やがてこれらに対するように第1楽章の第2主題が現れます。この転用された第2主題がキーポイントとなり変化しながら先の主題群と立体的に交叉することで、曲全体に統一感そして終焉への高揚感が与えられていきます。この比類なき気高さをもつ作品はまた、晩年の作者の円熟に達した滋味深い境地をも明確に映し出しています。

プロフィール: 古典四重奏団 QUARTETTO CLASSICO

86年東京芸術大学及び同大学院卒業生により結成。レパートリーはJ.S.バッハの「フーガの技法」に始まり、バルトーク、ペルトなど現代に至るまで60数曲にのぼり、そのすべてを暗譜で演奏する。定期公演として、97年ベートーヴェン後期全曲、98年モーツァルト『ハイドンセット』、99年バルトーク全曲、00年ショスタコーヴィチ主要5曲、02年よりトリトン・アーツ・ネットワーク及び第一生命ホールとの共催でベートーヴェン全曲、03年シューベルト主要7曲、04年モーツァルト『ハイドンセット』。96年ニューヨークの鬼オステイヴ・ライヒと日本人として初めて「ディファレント・トレインズ」を共演(水戸芸術館主催)、99年ダンスカンパニー「ノマドーズ」との共演でギリシア公演(国際交流基金助成)、05年ドイツ公演(招聘元/バッハ・アルヒーフ・ライブツィヒ)、05・06年ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン(東京国際フォーラム)より招聘。日本室内楽振興財団、公益信託レイ・グレーラー記念室内楽基金、芸術文化振興基金、花王芸術・科学財団、ローム・ミュージック・ファンデーションより助成を受ける。これまでに、バルトーク第5番(Exelfon)、ベートーヴェン後期全4枚(ewe records)、バッハ『フーガの技法』(ewe records)、シューベルト『死と乙女』

(avex-CLASSICS) モーツァルト『ハイドンセット』全3枚(avex-CLASSICS) をリリース。97年度「村松賞」及び平成16年度文化庁芸術祭大賞受賞。 古典四重奏団HP <http://www.gregorio.jp/qc/>

☆川原千真 [第1ヴァイオリン] KAWAHARA Chima

東京芸術大学及び大学院修了。海野義雄、田中千香士、ガンバを平尾雅子に師事。読売新人演奏会出演。芸大オーケストラと共演。アンサンブル「音楽三昧」より5枚のCDをリリース、02年アメリカ公演(国際交流基金助成)。アンサンブル《BWV2001》メンバー。「バッハコンチェルティノー大阪」参加。00,04年バロックヴァイオリンによるバッハ無伴奏全曲演奏会開催。

☆花崎淳生 [第2ヴァイオリン] HANAZAKI Atsumi

東京芸術大学及び大学院修了。井上武雄、日高毅、J.W. ヤーンに師事。84年、北京・上海などで公演(中華人民共和国の招待)、85年カーネギーホールにて公演。86-87年ドイツ・カールスルーエに留学。「エルデーディ弦楽四重奏団」メンバー、01,03年ドイツ公演、02年CDリリース(ハイドン/op.76より)。アンサンブル《BWV2001》メンバー。

☆三輪真樹 [ヴィオラ] MIWA Maki

東京芸術大学卒。海野義雄、原田幸一郎、C. マッキントッシュに師事。87年ザルツブルク、92年ノルウェーのトロンハイムの各講習会に参加。バロックヴァイオリン奏者としても活躍。00,02年デュオ・リサイタル開催。「コレギウム・アルジェントウム」、アンサンブル《BWV2001》メンバー。「バッハコンチェルティノー大阪」参加。

☆田崎瑞博 [チェロ] TASAKI Mizuhiro

東京芸術大学卒。桑田晶、山岡耕彦、兎東龍夫、外山滋に師事。「音楽三昧」ではヴィオラと編曲、「タブラトゥーラ」ではフィーデルとガンバ、アンサンブル《BWV2001》では企画・制作とバロック・チェロを担当、「バッハコンチェルティノー大阪」参加。合計で20数枚のCDをリリース。北米・欧州・エジプト・インドなどで公演。

【古典四重奏団/今後の主な公演予定】

『クアルテット・ウェンズデイ』

11月1日(水)19.15 第一生命ホール #51, ドヴォルザーク/弦楽四重奏曲変イ長調・ト長調

12月24日(日)15.00 松明堂音楽ホール(新所沢) “佐々木節夫メモリアルコンサート” バッハ『フーガの技法』他

12月31日(日) 15.00 東京文化会館小ホール, “ベートーヴェン後期弦楽四重奏曲集”(内古典四重奏団は、14, 15, 16番を担当)

【1ヶ月に1通、メール通信サービス】

E-Mailにて、『古典四重奏団通信』をお送りいたします。ほぼ1ヶ月に1通、公演情報などを送信いたします。

お申し込みは古典四重奏団HPにて。 古典四重奏団HP <http://www.gregorio.jp/qc/>